

中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較

——参加者間の相互行為に注目して——

楊 虹

Abstract

This paper offers a comparison between topic openings of female Chinese and Japanese native speakers (CNS and JNS) in their native language conversations. The data consist of 20-minute audio-and video-taped dyadic conversations by 18 CNS pairs and 18 JNS pairs.

The results show that both CNS and JNS demonstrate 2 patterns of topic opening: (i) immediate opening and (ii) gradual opening. A significant difference between CNS and JNS was found in the distribution of these patterns. In CNS conversation, the distributions of (i) and (ii) are 62% and 38% respectively. In JNS conversation, they are 47% and 53%. That is, in CNS conversation, the topic opening process tends to be shorter than that in JNS conversation, where topics are opened gradually through negotiation.

Keywords : Chinese-Japanese comparison, topic opening, process analysis, interaction, unacquaintance

はじめに

会話は、人と人がコミュニケーションを行う重要な手段の一つであり、私たちは会話を含む様々な社会的相互行為を通して人間関係を構築していく。発話によって相手に伝わるのは、内容に関するメッセージだけではない。相手とどのような関係を築きたいか等のメタメッセージも同時に伝わるのである (Tannen1986, 1991)。しかしメタメッセージの解釈は会話の参加者の会話のスタイルや、相手との関係の捉え方によって異なるため、発話者が意図したものと異なるメタメッセージが伝わる場合もある。このような場合に必ずしもコミュニケーション上の問題が生じるわけではないが、相手に違和感を抱かせたり、互いの関係にマイナスの影響を与えたりする可能性はあるだろう。

筆者が中国の大学で日本人留学生と話をしていた時、話の途中で日本人留学生に「話を変えてもいいですか」と聞かれ、ひどく慌てたことがある。「それまでの話がつまらなかったのだろうか?」、「これから、何か重要なことでも言い出すのだろうか?」などと様々な推測をしたためだ。しかし、話が進んでも、一向に特別な話は始まらない。つまり、彼女は何か特別な話題を始めようとしたわけではなかったのだ。このような日本語母語話者の話題開始の仕方に対して、当時の私は、ある種の違和感を抱いた。また、中国人学生から、「日本人は話題を出すこと

に消極的だから話をしている疲れる」といった感想もよく聞く。それが理由で、交流を止めてしまう人さえいる。

以上のように、中国人は日本人の話題開始の仕方及び話題導入の少なさに違和感を抱く可能性が考えられる。一方では日本人も中国人の話題転換の仕方に異なる違和感を抱いているかもしれない。両者が相手の話題転換行動に抱く違和感は、それぞれの話題転換行動に対する解釈の違いや自分の期待や予想と異なる行動を取られたことに起因するのではないかと推測される。そこで、本研究は、中国語と日本語それぞれの母語場面の会話を対象として、両者の話題転換における話題開始に焦点を当て分析を試みた。

会話において、私たちは様々な場面で新しい話題を導入する。時には、会話の間を持たせるために意識的に「話題を出す」こともある。しかし、会話の話題は参加者同士の相互作用により作り上げられるものであるという観点から話題開始を考えると、話題開始は決して一人の参加者の導入発話で完結するものではなく、参加者間のやり取りを経て、成し遂げられるものである。これまでの話題開始に関する研究は、一人の参加者の話題導入発話に注目しているものが多いが、筆者は、参加者間のやり取りに注目し、話題開始のプロセスに焦点をあてて分析する必要もあると考える。

また、話題転換に関する研究では、会話参加者間の人間関係や、参加者の母語や母文化の影響が指摘されており、参加者間の人間関係により、話題開始のプロセスが異なるという指摘が見られる (Maynard & Zimmerman 1984)。しかし、母語や母文化の影響については、話題導入の一発話の比較分析しか見られず¹⁾、話題開始のプロセスを比較分析した研究は見当たらない。そこで、本研究は、中日母語場面の初対面会話における話題開始のプロセスを比較し、考察することを試みる。

1. 先行研究および目的

1.1 先行研究

本研究は、参加者間のやり取りを通して作りあげられるものであるという前提の下、話題を「ある一塊の談話で言及される事柄」と定義する。本節では、話題開始のプロセスに焦点を当てて分析するという本研究の目的から話題開始に関する先行研究の知見をまとめる。会話における話題開始のプロセスに関する研究について、中国語母語場面を対象とした研究は管見の限りないため、英語及び日本語の母語場面を対象とした先行研究の知見をまとめる。

英語による二者間会話を対象とした Maynard & Zimmerman (1984) は、話題開始はプロセスであり、会話参加者のやり取りによって成立するものであると指摘している。Maynard & Zimmerman (1984) は、話題が確立するまでのやり取りを話題の先行連鎖と称し、様々なパターンを提示している。話題確立発話が即座にみられる場合もあれば、話題導入発話に対して、相づち等最小限の応答しか得られず、話題として成立せずに立ち消えになってしまう場合もある。Maynard & Zimmerman (1984) は、友人同士の会話と比べ、初対面の会話では、人間関係や共通の経験等がまだ築かれておらず、自己開示やお互いの共通点を探することで親密度や友好関係を構築していくため、話題の確立までのプロセスにおいて会話参加者間のやり取りが長いと指

摘する。Maynard & Zimmerman (1984) が提示した話題確立の「先行連鎖」は、本研究の話題開始部に相当すると捉えられる。

日本語母語場面の話題開始についての研究は多くみられる（メイナード 1993, 村上・熊取谷 1995, 山本 2003, 中井 2003, 楊 2006a, 2006b など）。このうち、話題開始部を設けて分析した研究は、村上・熊取谷 (1995), 中井 (2003) と楊 (2006b) である。メイナード (1993) や山本 (2003), 楊 (2006a) は話題開始の 1 発話のみを分析し、話題開始のやり取りの連鎖については言及していない。

村上・熊取谷 (1995) と中井 (2003) は、話題開始部を提示しているが、話題開始における参加者間のやり取りに着目した研究ではない。村上・熊取谷 (1995) は、話題開始部にみられる言語行動を「先導 (initiation)」と「応答 (response)」とし、「応答」は、先導に対する即座の応答と説明している。また中井 (2003) は話題開始部の規定について、「情報要求—応答」と「情報提供／同意要求—応答／情報要求」のみ提示している。しかし実際の会話においては、話題導入発話の後、導入発話者が話そうとした事柄が即座に会話の話題になるとは限らない。導入発話が無視されたり、内容の伴う応答が返されなかったりする場合も考えられよう。

また、話題を「テーマ」「レマ」の連結関係で捉え、単一の発話を分析単位とする宇佐美・嶺田 (1995) は、話題開始部という概念を用いず、話題導入の最初の 1 発話の後のやり取りを「展開」と捉え、話題導入後のやり取りについては、「質問—応答型」と「相互話題導入型」という二つのパターンがあると報告している。宇佐美・嶺田 (1995) は、初対面の上下関係の異なる 10 組の会話を対象としており、「質問—応答型」は片方が質問をし、片方が応答するというやり取りがくり返しみられるパターンであり、主に目上と目下の会話に頻繁に現れるという。「相互話題導入型」は相手の質問に答えた後、関連する質問を相手に返すもので、話題を出し合うことによって会話を進行させるパターンで、同等の立場の参加者同士にみられるという。宇佐美・嶺田 (1995) では、会話の参加者間の上下関係との関連という視点から話題の「導入及び展開」の二つの特徴的なパターンが提示されているが、話題成立までのプロセスにどのようなパターンがあるかについては明らかにされていない。

話題開始部のやり取りにおける相互行為のプロセスを分析した研究は、管見のかぎり楊 (2006b) のみである。楊 (2006b) は、日本語母語場面における話題開始のプロセスを、「即受入れ型」「質問攻め型」「窺い合い型」という三つのパターンを提示したうえでそれぞれの割合を分析した。ただし、「話題開始部」と「話題導入のプロセス」、「話題導入発話」を併用しており、用語の整理やパターンの分類について、なお改善の余地があるように思われる。

以上、話題開始のプロセスにおける参加者間の相互行為の特徴について先行研究をみる中で、話題開始のプロセスは、参加者間の関係性等により異なることが明らかにされているが、日本語母語場面では、話題開始のプロセスにどのような特徴がみられるかについてはまだ明らかにされていないことが明確になった。

そこで、ここで本研究の話題開始部の捉え方を示す。本研究では、話題導入発話と話題開始部を区別する。話題導入発話は、当該話題区分の最初の実質的な内容を持った発話とし、話題開始部は、「先導—応答」のように 1 往復のやり取りと規定せず、話題導入発話から話題確立発話までの部分と定義し、話題開始は参加者間の相互行為によって協働的に作られるものである

と捉える。

1.2 目的及び課題

本研究は、中国語母語場面と日本語母語場面の会話における話題開始のプロセスを分析し、両者に違いがあるかを探ることを目的とし、下記2つの課題を設けた。

1. 中、日母語場面の話題開始のプロセスにどのようなパターンがみられるか。
2. 中、日母語場面の話題開始のパターンの出現傾向に違いがみられるか。

2. 研究方法

2.1 データ

本研究は、初対面の女子大学生の二者間会話をデータに用いた。話題転換の仕方は、会話参加者の性別や年齢、親疎関係、力関係に大きく影響される (West & Garcia 1988, Okamoto & Smith-Lovin 2001, Jones 2004, 徳永 2007)。本研究は、中、日それぞれの母語場面の会話の比較を行うため、会話参加者の年齢、親疎関係などの条件が統制された会話を対象にする必要があると考え、性別を女子に統一して大学生を対象とした。初対面会話を対象としたのは、初対面の相互作用はその後の印象形成に影響を与え (小川 2000)、より深い人間関係の構築に大きな影響を与えると考えられるからである。

データは中国語母語場面と日本語母語場面それぞれ 18 組の会話の録音及び録画からなる。参加者には、調査者本人が「会話についての研究をしており、そのための素材を収集している。初めて会う人と 20 分間話してほしい」と依頼をし、具体的な研究目的は明かさなかった。また収録時は、「20 分ぐらい自由にしゃべってください」という指示を出した後、調査者は席をはずした。

中国語母語場面のデータは、2005 年 3 月と 2006 年 2 月に、中国国内の二つの大学 (北京と上海) で収集したものである。会話の参加者は 18 ~ 29 歳の大学生同士・大学院生同士であり、中国各地から当該二つの大学に来ている学生を対象とした。日本語母語場面のデータは、2005 年 3 月から 2007 年 5 月にかけて、日本国内の某大学で収集したものである。会話参加者は 18 ~ 24 歳の大学生同士・大学院生同士である。ペア内の参加者の学年差は一学年以内である。

2.2 分析方法

2.2.1 分析対象及び範囲

本研究では、全ての会話内容を文字起こしし、会話の冒頭から 20 分までの文字化資料を分析対象とし、音声及び映像を補助資料とした。ただし、会話の冒頭にみられる自己紹介の部分は話題とせず²⁾、分析対象から除外する。

分析の単位は「発話」である。発話の定義は、杉戸 (1987) に従い、「ひとまとまりの音声言語の連続で、他の会話参加者の音声言語の連続や (話し手自身の) ポーズにより区切られる単位」とする。中、日母語話者の参加者にはそれぞれ C1 ~ C36, J1 ~ J36 までの通し番号を付け、発話者は、会話参加者につけられた通し番号で示す。

2.2.2 話題の区分

まず、話題の単位及び区分について述べる。話題には階層性があり、複数の関連する話題がより大きな話題としてのまとまりを形成する（村上・熊取谷 1995 他）。例えば、表 1 で示したように、下位話題①、②は「1. 高校時代の通学事情について」という上位話題にまとめられる。下位話題③～⑥は「2. 大学の授業に対する失望感について」という上位話題にまとめられる。

本研究では、会話の流れが大きく変わる際の話題開始のプロセスを考察するため、より大きな内容のまとまりを持つ上位話題を単位として話題を区分した。具体的には、会話の新たな流れを作るきっかけとなる発話が後続話題の始まりであり、その発話の直前に話題の境界（罫線）を引く。参加者間の発話交換を区切りとし、会話の冒頭から発話の通し番号をつける。話題の境界をまたがる同じ発話者の発話を「1-1」「1-2」のように示す（後掲会話例参照）。

表 1 話題区分例（日本語母語場面ペア 8 の会話データの一部より）

上位話題	下位話題
1. 高校時代の通学事情について	① J15 の高校時代の通学事情
	② J16 の高校時代の通学事情
2. 大学の授業に対する失望感について	③期待外れな大学
	④ J15 の大学入学前の期待
	⑤英語の授業のレベルが低い
	⑥興味を持てる授業が少ない

話題の区分については、両場面とも、それぞれの母語話者一人（中国語の会話には中国語母語話者、日本語の会話には日本語母語話者）の協力を得て、一致率を求めた。全体の 3 割の分析資料（6 ペア）を筆者と協力者それぞれが区分し、一致率を求めた結果、中国語の会話は 88%、日本語の会話は 85%であった。一致しなかった箇所については、協力者と協議した上で決定した³⁾。残りの話題の区分は筆者が行った。

2.2.3 話題開始部の認定

話題開始部における参加者間のやり取りの分析に先立ち、まず話題開始部の認定を行う。一つの話題は、一般に「開始部」「展開部」「終了部」に分けられると考えられる（村上・熊取谷 1995, 中井 2003）。ただし、実際の会話において、話題の導入発話はみられるものの、展開部がみられない場合もある。それらは途中で挫折したものとみなし、分析対象外とする。

話題確立発話の認定については、Maynard & Zimmerman (1984) に従い、「最小限の応答」発話は、話題確立発話とみなさない。本研究では、最初の話題導入発話のみられた後、相手参加者がその事柄について、「具体的に語る」または「導入発話者に関連した質問」をする発話を話題確立発話とする。話題の開始部は、当該話題区分の最初の発話から、話題確立発話までとする。話題開始部の認定は、話題の区分と同様の手続きで行った。なお、一致率は中国語の会話では 91%、日本語の会話では 93%であった。

上記の手順で話題開始部を認定した後、途中で挫折した話題を除いた話題開始部を対象に、参加者間のやり取りを分析し、話題開始のパターンを抽出する。次に、各パターンの全体に占める割合を算出する。

3. 結果

3.1 話題開始のパターン

中国語母語場面では、合計 325 の話題導入発話がみられ、ペア平均の話題数は 18 であった。日本語母語場面では、合計 193 の話題導入発話がみられ、ペア平均の話題数は 11 であった。中国語母語場面での話題転換は、日本語母語場面及び中日接触場面より頻繁に行われていることがわかる。それぞれに途中で挫折したものがみられ、中国語母語場面では 24 の中途挫折の話題を除いた 301 の話題が確立し、日本語母語場面では、13 の中途挫折の話題を除いた 180 の話題が確立した。

参加者の相互行為の特徴から、話題導入発話から話題確立までのプロセスを分析し、そのパターンを抽出し、分類した。その結果、まず大きく (1) 即時的開始、(2) 漸次的開始と二つのパターンがみられた。(1) 即時的開始とは参加者間の 1 往復のみのやり取りで話題が確立されるパターンであり、(2) 漸次的開始とは 2 往復以上のやり取りを経て、話題が確立されるパターンである。また、(2) 漸次的開始は、さらに a) 質問一応答連続型、b) 相互型、c) 確認連鎖挿入型という三つのパターンに下位分類できた。

以下では中国語及び日本語母語場面の会話例を挙げながらそれぞれのパターンの特徴を述べる。

(1) 即時的開始

即時的開始は、導入発話とそれを受け入れる発話という 1 往復のやり取りで話題がすぐに確立されるパターンである。導入発話に対し、受け手は、導入される事柄について具体的に語るか、または同じ質問を相手に返すことにより、相手の発話内容に興味を示し、会話の話題として即座に取り上げる。

会話例 1 は中国語母語場面の即時的開始の会話例である。会話例 1 では、C11 の導入発話（授業の受講者数の質問）を受け（248）、C12 は即座に自分の専攻とコースの事情を詳しく紹介した（249）。この 1 往復のやり取りで「授業の人数について」という話題が確立した。

会話例 1⁴⁾ 授業の人数

		【日本語訳】		
248	C11	诶那你们每次上课是不是都 100 多人啊？	え じゃあ授業は毎回 100 人以上もいるのですか？	→話題導入発話

249	C12	<u>不是 也有也有 不是有不</u> <u>同的方向嘛 然后只有那种</u> <u>整个院的必修可能 100 多人</u> <u>像个个分开各个方向的人就</u> <u>少了 像我们那个方向的大</u> <u>概 15 16 个人吧</u>	<u>いいえ そういう授業もありますけど</u> <u>いろんなコースがあるでしょう それ</u> <u>で必修科目だけが受講者が 100 人以上</u> <u>になる可能性がありますが わかれて</u> <u>いるもの 各コースに分かれている授</u> <u>業は人が少ないです 私のコースだっ</u> <u>たら 15～16 人ぐらいでしょうか</u>	→話題確 立発話
250	C11	哦	「ふうん」	
251	C12	也挺少的	結構少ないです	

日本語母語場面でも即時的開始がみられた。会話例 2 では、J12 の導入発話（263）を受け、J11 は即座に自分の専攻のゼミの事情を紹介した（264）。この 1 往復のやり取りで「ゼミについて」という話題が確立された。

会話例 2 ゼミ

263	J12	<u>ゼミとか言って [結構先生に偏りますか？]</u>	→話題導入発話
264	J11	[うん あ：でも地理って なんか専門としている人はそれぞれ一人ずつしかいないから なんか同じ専門で迷っているけど やっぱやり方とか人によっ て全然違うとか 普通に文献を読んで発表させたりとか 後なん か自分でただ大きいテーマを決めて自分で調べてきて発表と か先生が全部やるとか [ビデオみるとか 全く異なる	→話題確立発話
265	J12	[お：生徒によって偏るとかありますか？]	

(2) 漸次的開始

漸次的開始は、(1) 即時的導入と比べ、話題導入のプロセスが長い。三つの下位分類にはそれぞれ異なる特徴がみられる。

a) 質問一応答連続型

質問一応答連続型では、話題導入のプロセスに「質問一応答」の連鎖が連続してみられる。つまり話題導入発話をした参加者から強い働きかけがみられるという特徴がある。最初的话题導入発話に対して、相手からは最小限の応答のみみられ、この時点では話題はまだ確立されていない。そして話題導入発話をした参加者がさらに質問をし、相手から話題に関連する発話を引き出す。

会話例 3 は中国語母語場面の 1 例である。ここでは、C15 は C16 に韓国語の発音について質問し、C16 から「日本語より難しい」と最小限の応答を受け、さらに「発音の数はどれぐらいあるか」と続けて質問した。C16 は 40 個と具体的な情報を付加して答え、韓国語の発音という話題がここで確立される。このやり取りでは、C15 が情報を引き出す役、C16 がそれに応じる役

を担っており、話題開始部において、C15 がリードしていることがわかる。

会話例 3 韓国語の発音

		【日本語訳】		
313	C15	诶 难学吗?就是韩语的发音?	えっ難しいですか つまり韓国語の発音	→話題導入発話
314	C16	韩语的发音比日语难 我觉得 hhh	韓国語の発音は日本語より難しいと思います	
315	C15	他一共有多少?就是基础	全部でどれぐらいありますか?つまり基本的なもの	
316	C16	一共有 40 个 就是字母是 40 个字母 然后	全部で 40 個あります つまりハンゲル文字 それから	→話題確立発話
317	C15	哦 会有字母 就是那些 ABCD 字母表那种	あ ABCD みたいな感じの表があるんですね	
318	C16	嗯	う：ん	
319	C15	还是怎样说	それとも	
320	C16	跟西洋字母没有	アルファベットとはちょっと	

会話例 4 は日本語母語場面の 1 例である。会話例 4 では、J13 は J14 にゼミに何人いるかと質問し、J14 から「多いですよ」という具体的な人数が提示されない最小限の応答を受け、さらに「やっぱり人気なんですか?」と続けて質問した。今度は J14 は具体的な情報を付加して答え、ゼミという話題がここで確立される。

会話例 4 ゼミ

364	J13	何人ぐらいいるんですか ○○ゼミって		→話題導入発話
365	J14	○○ゼミは多いですよ：＝		
366	J13	＝やっぱり人気なんですか?		
367	J14	う：んていうか なんか無難なところであ[るし： 感じがあっても今年ちょっと減ったかな：		→話題確立発話
368	J13		[hhhhhhhhh へ：：：：：	
369	J14	4 年生が 5 人ぐらい		

b) 相互型

相互型は、質問—応答連続型とは異なり、どちらか一人の参加者が会話をリードするという特徴はみられず、参加者の双方が相手の反応をみながら相互に情報を出し合い、話題を確立していくパターンである。最初の導入発話をした参加者は、相手の最小限の応答を受けて、質問で相手から積極的に発話を引き出すのではなく、意見や評価を述べたり、相手の発話をくり返

したり、相づちを打ったりして、相手の次の反応を窺う。

会話例5は中国語母語場面の相互型の例である。ここでは、C8は第2外国語の授業でC7を見かけなかったことを話したが(56)、C7からはその授業を履修していないという理由となる最小限の応答が得られた(57)。それに対し、C8はあいづちを打つにとどまっている(58)。C7もさらに「取らなくて済むようになった」と57の言い換えをした(59)。それに対し、C8は60で英語の勉強について悩んでいると述べ、ここで英語の学習という話題が確立した。会話例3や4と違って、この会話例では、話題導入者C8も話題導入を受けたC7も話題導入の直後で話題の方向を決めるのではなく、やり取りを通して話の方向を徐々に決めていくプロセスがみられた。

会話例5 英語の学習

【日本語訳】

56	C8	<u>我们昨天上那个2外英语课的</u> <u>时候还有好多德语系的</u> <u>但没</u> <u>没看到你嘛</u>	昨日第2外国語の授業でド イツ語専攻の人もたくさん いました でもC7さんを見 かけませんでしたね	→話題導入発話
57	C7	啊 我那个没修了	あ：私はあれを履修しなかつ たです	
58	C8	哦	あ：	
59	C7	所以我就不用学了	だから取らなくて済むよう になりました	
60	C8	<u>哦 我还得学英语</u> <u>把我烦死</u> <u>了</u>	あ：私は英語も勉強しなけ ればならないので <u>本当に</u> <u>頭が痛いです</u>	→話題確立発話
61	C7	挺好的 我英语现在都快忘了	いいじゃないですか 私は もう英語をほとんど忘れて しまっています	

会話例6は日本語母語場面のこのパターンの例である。ここでは、J14が相手の専攻について尋ねたが(65-2)、J13は詳しく語らず、「仏像の研究」という最小限の応答をしている(66)。それに対し、J14は「洪いですね」の評価表現を加え(67)、さらに質問したりはせず、相手の次の反応を待つ。J13は新しい情報の追加をせず、J14の発話の一部をくり返した(68)。J14もまた前と同じ発話をくり返した(69)。70でようやくJ13が具体的に語りだした。このJ13の発話でこの話題が確立したと考えられる。このように、参加者の二人のやり取りで話題が徐々に開始されていく様子が端的に示されている。ここでは、最初的话题導入発話をしたJ14は相手が具体的に語るまでに「語ってほしい」というサインを送り続けていたが、積極的に相手に働きかける発話はみられなかった。

会話例6 専攻について

65-2	J14	美術史は <u>どういうことをや</u> っていらっしやるんですか？	→話題導入発話
66	J13	hhhh 私は：仏像の研究	
67	J14	仏像ですか 渋いですね	
68	J13	渋いって言っています	
69	J14	渋いですね：[：	
70	J13	[ほかの人はみんないろいろで： <u>西洋絵画のエッ</u> <u>シャーをやったりとか 日本近代の浅井忠という方をや</u> <u>ったりとか：</u>	→話題確立発話
71	J14	あ：	

c) 確認連鎖挿入型

「確認連鎖挿入型」は、話題導入発話がなされた後、導入発話の意味・意図が理解されず聞き返しが起こったため、話題が確立されるまでに確認のための発話連鎖がみられるものである。

会話例7は中国語母語場面の1例である。ともに大学一年のC29とC30であるが、C30は高校の同級生と連絡を取っているかどうかの質問をした(191)が、それがC29に伝わらなかったようである。C29は192で「うん？」とC30の発話の意味がわからないというサインを送った。そしてC30は質問を言い換えた(193)。今度はC29から返答が得られた(194)。それは、小学校の同級生とも連絡を取っているという詳しい返答であった。ここで、C29の具体的な情報の提供を持って「昔の友達との連絡」という話題が確立した。

会話例7 昔の友達との連絡⁵⁾

		【日本語訳】		
191	C30	你们这些同学出去 跟你联系 吗？	同級生たちは出てから あな たに連絡を取っていますか？	→話題導入発話
192	C29	嗯？	うん？	
193	C30	跟以前的同学联系吗？	以前の同級生と連絡を取っ ていますか	→確認連鎖
194	C29	联系 我们小学同学都在联系	取っています 私は小学校 の同級生とも連絡を取って います	→話題確立発話
195	C30	我们高中同学来学校以后都隔 绝人世	私の高校の同級生とはここ に来てから音信不通になっ ています	
196	C29	为什么？为什么跟人家隔绝 啊？	どうして？どうして連絡を 取らないのですか？	

会話例8は日本語母語場面のこのパターンの例である。会話例8では、J10はJ9の質問に対し、「これ？」と指で録音機械を指しながら聞き返した(39)。そしてJ9から「はい」という確認の

応答を得て（40）から、会話実験に協力する経緯について詳しく語り始めた。

会話例 8 会話実験に参加するきっかけ

38	J9	どうい <u>う</u> き <u>っ</u> か <u>け</u> でこれに <u>参</u> 加 <u>さ</u> れ <u>た</u> の <u>で</u> す <u>か</u>	→話題導入発話
39	J10	これ？ {指で録音機械を指す}	→確認連鎖
40	J9	はい	
41	J10	これは <u>なん</u> か <u>マ</u> ル <u>シ</u> ェで友 <u>達</u> と <u>し</u> ゃ <u>べ</u> っ <u>た</u> ら <u>〇〇</u> さん <u>が</u> 「 <u>あ</u> <u>の</u> う」と言 <u>っ</u> て「 <u>や</u> り <u>ま</u> せ <u>ん</u> か」と言 <u>わ</u> れ <u>て</u> <u>お</u> い <u>い</u> です <u>よ</u>	→話題確立発話
		<u>面</u> 白 <u>そ</u> う <u>なん</u> か <u>私</u> も <u>なん</u> か <u>こ</u> う <u>い</u> う <u>会</u> 話 <u>と</u> か <u>興</u> 味 <u>が</u> あ <u>る</u> し	
42	J9	うんうん	
43	J10	どうい <u>う</u> ふ <u>う</u> に <u>や</u> る <u>の</u> か <u>な</u> あ <u>と</u> 思 <u>っ</u> て	

3.2 中、日母語場面の話題開始のプロセスのパターンの出現傾向

話題開始のプロセスのパターンについて、中、日母語場面ともに、全てのパターンがみられたが、それぞれのパターンの占める割合をみると、両者に違う傾向がみられた（図1参照）。中国語母語場面では、即時的開始は全体の62%を占め、最も多かった。中国語母語場面では、話題開始のプロセスは、話題導入発話とそれを受け入れる発話という1往復のやり取りで話題がすぐに確立される即時的開始に集中しており、即時的開始が話題開始の基本的なパターンと言える。一方、日本語母語場面では、即時的開始は全体の47%と半数以下であり、基本的なパターンにはなっていないことが分かる。

次に、1往復のやり取りで話題が確立されない漸次的開始の下位分類をみると、中国語母語場面では、b) 相互型はa) 質問—応答連続型の2倍弱であったのに対し、日本語母語場面では、b) 相互型はa) 質問—応答連続型の4倍であり大勢を占める。なお、c) 確認連鎖挿入型について、両場面とも3%ととどまり、ほとんどみられないことが共通している。

以上の中・日母語場面における話題開始のパターンの生起の分布について、カイ2乗検定をした結果、有意差がみられた ($\chi^2=17.317, df=3, P<0.01$, 両側検定)。

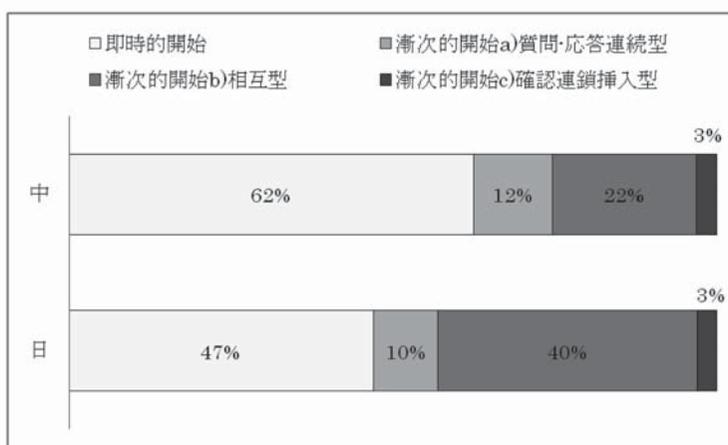


図1 中国語母語場面の話題開始のパターンの割合

以下では、中、日母語場面の話題開始のプロセスの特徴及び相違点について述べる。

中国語母語場面では、相手の導入発話を受けて、即座にそれについて具体的に語り始める等して話題を確立させる即時的開始は全体の62%と最も多く、即時的開始が基本的な話題開始のパターンであることが明らかになった。前掲の会話例1からも、中国語母語場面における話題が導入されてから即座に確立される様子が窺われる。

一方、日本語母語場面では、上位レベルの分類では、どちらか一方のパターンに集中することは見られず、話題開始の基本的なパターンとみなせるものはみあたらない。会話の参加者は、導入される話題に応じて、即座に取り上げるか、交渉しながら取り上げるかの判断をしていることが窺われる。

また、1往復のやり取りでは話題が確立されない漸次的開始をみると、中、日両場面ともに、相互型、質問一応答連続型、確認連鎖挿入型の順に多かった。ただし、中国語母語場面と比べ、日本語母語場面では、相互型の占める割合は顕著に高い。

相互型では、話題導入発話者が、相手の最小限の応答を受けて、さらに質問をするよりも、相槌やくり返しをして一旦控えめになったり、相手の発話をさらに引き出す評価発話をしたりしている。相互型の話題開始のプロセスには、会話を過度にリードせずに、相手の反応をみながら、徐々に話題を開始していくという話題導入者の会話姿勢が窺われる。日本語母語場面では、話題開始には基本的なパターンがみられなかったが、話題導入者の行動をみると、話題が即時的に確立しない場合、話題導入者の次の行動は控え目になり、相手の出方を窺いながら徐々に情報を付加していき、強く働きかけることを避け相手と一緒に話題を徐々に確立していく傾向がみられた。

一方、質問一応答連続型は、話したい話題について、相手から話題確立の発話が即座に与えられなかったため、さらに質問することにより、相手のより積極的な反応を引き出すパターンである。同じく初対面の話題導入を分析した宇佐美・嶺田(1995)によれば、質問と応答の連続による話題導入は、「共話」的「相互話題導入型」と異なり、「対話」的であり、「目上と目下(「教官」と「大学院生」)の役割意識、すなわち目上が目下の答えに関連付けて次の質問をし、会話をリードしていくという配慮が働いているという。本研究では、同等の立場にいる大学生同士の初対面場面を分析した結果、中、日母語場面ではともに質問一応答連続型が生起するものの、その割合は低いことがわかり、初対面の会話において、主導権を取る話題導入が少ないことが示された。三牧(2002)は初対面の大学生同士の会話における対称志向を指摘しているが、このような対称志向は、初対面会話の特徴の一つであり、言語を問わず中、日母語話者に共通するものであることが示唆された。

4. まとめ

本研究は、中、日母語場面の話題開始のプロセスに焦点をあて分析した。その結果、中国語母語場面では日本語母語場面とは異なる傾向がみられた。

両場面では、共通して即時的開始、漸次的開始という二つのパターンがみられ、また漸次的開始の三つ下位分類も両場面ともみられた。しかしこれらのパターンの分布には大きな違いが

みられた。中国語母語場面では、即時的に話題を開始するのが基本的なパターンとなっている。つまり、相手の語りたいことを即座に取り上げることが基本姿勢であり、そのため話題開始のプロセスが短く、会話が速いテンポで展開していくのである。中国語母語場面の話題導入数が日本語母語場面より多かったことも、このような速いテンポの会話のスタイルの表れとも言えよう。一方、日本語母語場面では、即時的開始は全体の半分以下である。相手の導入発話に対して乗り気でなかったり、相手の意図を見極めてから語るといった様々な状況や個別的要因から、即時的開始となったやり取りは少なく、会話の参加者が相手の出方を窺いながら徐々に情報を付加していくという特徴がみられた。本研究は、話題開始のプロセスの分析を通して、中国語母語話者と日本語母語話者の異なる会話のスタイルの一端を明らかにした。

楊（2007）は中、日母語場面の話題終了のプロセスを比較し、日本語母語場面と比べ、中国語母語場面の話題終了のプロセスが短いと指摘している。本研究の結果と合わせてみると、中国語母語場面では話題転換そのもののプロセスが短いということが指摘できよう。母（2001）は、中国人と日本人に対する質問紙調査の結果から、日本人は親しくない人には相手との距離に配慮するストラテジーを好んで使うが、中国人は親しくない人に対しても、相手との距離に配慮するより親密さを強調するストラテジーを使うと指摘している。本研究でみられた中国語母語場面での話題開始の特徴からも、中国語母語話者の互いの距離を縮めることを志向する話題開始のスタイルが浮かび上がった。すなわち、中国語母語場面では初対面の会話の参加者は、相手参加者が話したいことをすぐ話題にすることによって、相手とは気兼ねなく話しているという心的態度を示す。また、参加者双方の速やかな話題開始により、会話が速いテンポで行われ、より多くの話題について話すことにより、より多く情報交換を行い、相手を知り、相手に知ってもらうことにより、互いの距離をさらに縮める、ということを行っているのである。中国語母語場面の話題開始のパターンは、初対面会話において、お互いをもっと知りたい、距離を縮めたいと言うコミュニケーションのニーズを満たすための中国語母語話者の会話のスタイルの一端を示すものであると言えよう。

一方、日本語母語場面の話題開始には基本的なパターンがみられなかったが、話題導入者の行動をみると、話題が即時的に確立しない場合、話題導入者の次の行動は控え目になり、相手の出方を窺いながら徐々に情報を付加していき、強く働きかけることを避け相手と一緒に話題を徐々に確立していく傾向がみられた。このように相手の意向を確認しつつ慎重に会話運びをする姿勢は、会話の相手に対する配慮を示し、初対面の相手との距離を一定に保つことを志向する日本語母語話者の会話のスタイルの一端を示すものであると考えられる。

Tannen（1986, 1991, 1993）は Goffman（1974）が提起している相互行為のフレームを「会話における期待の枠組み」と会話のスタイルの相違を説明する概念に敷衍し、異文化間⁶⁾の会話における相違を説明している。本研究でみられた中、日母語場面の話題開始のプロセスの相違も、中、日母語場面の初対面会話における会話の期待の枠組み、すなわちフレームの違いによるものと考えられよう。中国人学習者が日本語母語話者の非積極的な話題導入に苛立ちを覚えるのであれば、それは、中国語母語話者と日本語母語話者の会話のスタイルの違い、及びその背後にある日本語母語話者の初対面会話における距離の取り方⁷⁾というフレームの違いによるものと気付かなかつたからであろう。そして、異文化間コミュニケーションにおける会話

のスタイルやフレームの相違による影響に気づかなければ、中国語母語話者は、会話に非積極的な「日本人像」を知らぬ間に作りあげてしまう可能性もあろう。他方で、日本語母語話者も、無遠慮に話題を導入していく中国人に「距離の取り方がわからなくなる」「近づかれ過ぎる」と異なる意味での疲れを感じてしまう恐れが推察される。

おわりに

本研究は中、日母語場面を比較し、話題開始のプロセスにおけるそれぞれの特徴を明らかにした。本研究で得られた知見から、異文化間コミュニケーションにおいて、互いの母語や母文化による会話のスタイルやフレームの影響を把握することは、円滑なコミュニケーションやより深い人間関係の構築に寄与するものであると考える。

さらに、中日間のより円滑なコミュニケーション及び良好な人間関係と相互理解のためには、互いの会話のスタイルやフレームの違いを把握し、自らの期待から外れた相手の言語行動に対し、その母語による会話のスタイルの影響を考慮して早急な評価を避けることが重要であろう。

外務省の統計によると、2007年中国上海における日本人の長期滞在人数は47,731人となり、ニューヨークを抜いて1位となっている⁸⁾。また中国国内における日本語の学習者数は68万人を超え、韓国に次いで世界2位である⁹⁾。経済急成長が続く中国への企業進出等により、駐在員や留学生の数は今後も増える傾向にあると思われるが、中国人とのコミュニケーションの第一印象を決める初対面の場面での会話が、互いのその後の関係構築にマイナスの影響を与えないためにも、事前に双方の会話のスタイルの相違を把握し、理解することが大切であろう。異文化間のコミュニケーションの問題は、互いのスタイルの相違によって生じるのではなく、互いのスタイルの相違に気付かないがために生じるものである。互いのスタイルの違いを把握すればこそ、それに応じて自らの行動を調整し、接触場面の会話の新たなフレームの創出が可能となるのである。そして、中国語及び日本語教育に携わる者は、学習者への会話教育を行う際には、学習者の母語による会話のスタイルを考慮した上で、相互行為能力としての会話能力の育成に力を注ぐことも必要であると考えられよう。

本研究は女子大学生を対象としたが、性別による会話のスタイルや話題転換のスタイルの違いについてはすでに指摘されているので(奥山2005)、今後は性別を変え、男性同士の会話や男女間の会話における中日間の話題開始のスタイルの相違についても明らかにする必要がある。また、今回は大学生を対象としているが、社会人同士の会話では、異なる結果が得られる可能性も考えられるので、今後は、社会人同士の会話や、ビジネス場面の会話等より幅広くデータを収集し、研究を進めていくことが望まれる。

また、本研究では、中、日母語場面を比較分析したが、今後は中日接触場面を取り入れ、本研究の結果を踏まえて、分析し考察を行いたい。Goffman (1967) は、「相互行為の基本的特徴が相互受容」であり、すなわち「そこにいる人たちのとっている方針はそのまま認められ、それぞれの人が自分で選んだと思われる役割を当人が実行するのそのまま認められる」(p. 11, 浅野訳)と指摘している。中日接触場面では、中国語母語話者と日本語母語話者は相手の言語行動に応じて調整をしていることが予想される。今後は、中、日母語話者がそれぞれどのよう

な母語場面での言語行動を接触場面に持ち込んでいるのか、また相手の言語行動に応じて、どのような調整を行っているか等、さらなる詳細な分析を行って行きたい。

付録

文字化規則

- ： 音の引き延ばしを示す。「：」の数は長さを表す。
- ? 文末上昇イントネーションを示す。
- hhh 呼気（主に笑い）を示し、hの数は笑いの長さを表す。
- [重なりの始まりを示す。
- = 直前 / 直後の発話との間に間がないことを示す。
- プライバシーにかかわるため伏せておく発話を示す。
- {文字} 非言語行動の説明である。

注

- 1) 例えば、日英の話題転換を比較分析した Yamada (1989) は、話題を明示的に示すかどうか、日英の違いが見られると述べている。
- 2) Gardner (1987) によれば、挨拶や自己紹介は会話の開始のルーティン化した行動であり、話題とはみなさないのが一般的である。
- 3) 協力者と意見が分かれ、いずれも説得されない場合、第三者の意見を参考にする場合もある。
- 4) →の右にある説明は下線付き発話についてのものである。以下も全て同様である。
- 5) □で囲む発話は、確認連鎖に該当する発話である。以下全て同様である。
- 6) Tannen (1986, 1991) では、異文化は異なる母語話者間に限らず、同じ母語を持つ人同士でも、男女間や異なる文化背景を持つ者同士にもみられる。
- 7) 中・日母語話者の距離の取り方の違いについて、姚 (2005) は、初対面におけるあいさつの仕方や発話内容から、中国語母語話者の距離の取り方は、日本語母語話者からみれば、近づきすぎて失礼な印象を与える可能性があるとして論じている。
- 8) 2008年9月4日の朝日新聞朝刊の一面記事による。
- 9) 国際交流基金『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－（概要）』

参考文献

- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2, 130-145.
- 小川一美 (2000) 「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者及び会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』47, 173-183.
- 奥山洋子 (2005) 「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較—日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に」『社会言語科学』8 (1), 69-81.
- 国際交流基金 (2008) 『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年（概要）』.
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『国研報告書 92 談話行動の諸相』三省堂, 68-106.
- 徳永あかね (2007) 「接触場面における日本語母語話者の発話習性—話題管理の男女差に注目した一考察」『AJALT 日本語研究誌』3, 3-17.
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, 71-95.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社

- 会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」(特集: 言語の対人関係機能と敬語)『社会言語科学』5 (1), 56-74.
- 母育新 (2001) 「待遇行動における日本人と中国人の比較—ポライトネスの視点からの考察」『麗沢大学紀要』73, 209-225.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版.
- 山本綾 (2003) 「話題転換についての一考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として」『えちゅーど』33, 57-81.
- 楊虹 (2006a) 「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』8, 327-336.
- 楊虹 (2006b) 「中日母語場面の初対面会話における話題導入のプロセスの比較」『社会言語科学会第18回大会発表論文集』16-19.
- 楊虹 (2007) 「中日母語話者の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して」『世界の日本語教育』17, 37-52.
- 姚灯鎮 (2005) 「配慮表現の日中対照研究」『日中言語対照研究論集』7, 101-113.
- Gardner, R. (1987) The identification and role of topic in spoken interaction, *Semiotica*, 65, 129-141.
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York, NY: Doubleday Anchor, (浅野敏夫 (訳) 2002 『儀礼としての相互行為 (新訳版): 対面行動の社会学』法政大学出版局).
- Goffman, E. (1974) *Fram analysis: An essay on the Organization of experience*, Boston, MA: Northeastern University Press.
- Jones, K. (2004) Managing topics of conversation in Japanese, In P. Szatrowski, (Ed.), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction* pp. 29-64, Tokyo: Kurosio.
- Maynard, D., & Zimmerman, D. (1984) Topical Talk, Ritual and the Social Organization of Relationships, *Sicvak Psychology Quarterly*, 47 (4), 301-316.
- Okamoto, D., & Smith-Lovin, L. (2001) Changing the subject: gender, status, and the dynamics of topic change, *American Sociological Review*, 66, 852-873.
- Tannen, D. (1984) *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*, Norwood, NJ: Ablex.
- Tannen, D. (1986) *That's not what I meant!: how conversational style makes or breaks relationships*, New York, NY: Ballantine Books.
- Tannen, D. (1991) *You just don't understand: women and men in conversation*, New York, NY: Ballantine Books.
- Tannen, D. (1993) *Framing in Discourse*, New York, NY: Oxford University Press.
- West, C., & Garcia, A. (1988) Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men, *Social Problems*, 35, 551-573.
- Yamada, H. (1989) *American And Japanese Topic Management Strategies In Business Meetings, a doctoral dissertation*, YUSHODO Dissertation Service Center.